

ミニデイ【おとこの台所 桜新町だより】

発行責任者 桜新町広報：竹内潔、岡元正史

● 開高健（1930年12月30日～1989年12月9日）、日本の小説家。

作品は「パニック」「裸の王様」や、ベトナム戦争の凄烈な体験をもとにした「輝ける闇」など多数。また趣味の釣りについて、世界の各地での体験を綴った楽しい紀行本の「フィッシュ・オン」「オーパ！」などでも知られる。

開高はドイツで釣具店主にルアー・フィッシングの手ほどきを受けた。彼はルアー（擬似餌）のうち、スプーンとスピナーを好んだ。スプーンの起源は、匙を誤って川に落としたら鱒が食い付いてきて、それで生まれたという巷説。開高は、英国の文学者サミュエル・ジョンソンを引用。

「釣り竿は一方に釣り針を、もう一方の端に馬鹿者をつけた棒である」。魚と釣り馬鹿（人間）の騙し合いだ。

現在では浸透している「キャッチ・アンド・リリース」（釣った魚を川や海に逃す）という流儀を、最初に日本の釣り人に広めたのも開高だといわれている。

● 鮭サラー その生と死（別題名：鮭サラーの一生）～H.ウィリアムスン著。

小説は、アトランティックサーモン（大西洋鮭）の「鮭サラー」が主人公。

鱒やうなぎ、鳥、カワウソ、ザリガニ、そして人間など、鮭サラーが川や海で出会うすべての生き物の物語。駆け引きも打算もない生命の本能が淡々と描かれている話で、そこにある力強さと残酷さ。鮭サラーは小川で生まれて成長し、川と海を幾度か行き来を繰り返し、やがて一生を終える。鮭サラーは死んでも、それは新しく生まれる鮭やほかの動物たちの物語の始まりである。

開高健は帯の書評に書いている。

「深みのある単純、芸でない芸、筋肉質の無飾の文体を至上の美德とする自然文学。私は、何年かに一度は読みかえし、滴で味わっている。」

● 鮭は縄文時代から食べられていて、遺跡からは鮭の骨と獣骨や石製の手作りの釣り針が見つかっている。縄文人はただ食欲だけに駆られて鮭を獲っていたのか、それとも釣り馬鹿の至福の楽しみとして「鮭釣り」を享受していたのか。

スモーク・サーモンを肴に、スコッチ・ウィスキーを舐めながら縄文の鮭を思う。アームチェア・フィッシャーマンの秋の夜長の孤高の楽しみである。



9月の定例会 参加者は、5日（木）15名+ゲスト2名、13日（金）13名でした。

10月の定例会 3日（木）、11日（金）です。